

代用教員としての働き

無事に小学校教員としてデビューし、しばらくは小学校で勤務することとなりました。もちろん臨時講師としてですが、小学校では、大抵は産休・育休の代用教員でした。今は人手不足を解消するための加配制度があり、年度ごとの年間講師としての立場もありますが、当時は、産休・育休の代用なので、学期途中で辞令が切れ、勤務が終了することがほとんどでした。働き方としてはとても不安定な立場でした。

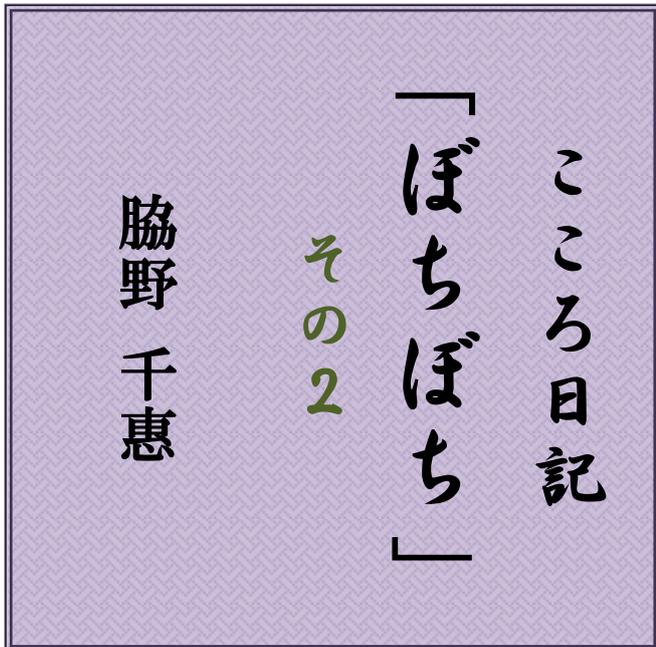
教員の産休とは、産前6週間、産後8週間で、子どもの誕生日から1年間は育休として取得することができます。今は最大3年の育休が可能だそうですが。

臨時講師は、うまくいけば約1年半、出産教員の産前産後と育休の期間を継続して勤務することができました。しかし、仕事場によっては産休のみとか、育休のみの代用など、数か月間だけといった変則的な契約の時もあります。出産は、何が起こるか予測が付きません。早く生まれる場合もあれば、一方で残念な結果になることも。私たち講師は主に口約束での仮契約のようなもの。初めは年度末3月まで休むはずが、「やっぱり3学期初めの1月から復帰します」なんて言われると、私たち講師は職を失うことになります。また年度当初などは、学級数が減ったことで、1週間で解雇なんてこともありましたから。それもあくまで代用教員ですから、致し方ないですね。

スーパーティーチャーとの出会い

2年目、私はM先生の産休の代用教員として採用されました。

M先生は、結婚によって遠い他府県から



赴任してきた教員でした。知らない土地での新生活。行政が違くと、学校の様子も随分と違ってきます。教育方針や学校業務の内容も戸惑うことが多かったと思います。

私自身も、新米です。お互い知らない者同士、何か惹かれるものがあり、互いに相談相手として親しくなっていました。

彼女が育休中は、学校の様子を伝えるに行くなど、職場復帰がスムーズにできるようにと、よく訪問させてもらいました。その時には、前任県での実践についていつも熱く語ってくれたものです。特に人権や道徳の学習内容からは、刺激的な実践を学ぶことがたくさんありました。ちょっとしたカルチャーショックを受けたものです。

彼女の産休育休の代用として1年半勤務を終えた後、幸いなことに継続して同じ学校に勤務することができました。たまたまM先生と同じ学年になり、良きパートナーとして働くことになったのです。

生活科の始まり

私たちは、2年生の学年所属になりました。

当時、指導要領が変わる時期であり、教育課程の内容も大きな変革がありました。

1・2年では、社会科と理科がなくなり、新たに生活科という教科ができることになりました。現場の教員はほんとうに大変でした。

生活科が何を目的としている教科なのか？その学習でどういう子を育てるのか？といったことが、なかなか見えてこない中でスタートでした。教育界では、生活科の研修会が目白押しで、教員は色々な教材や指導方法を得るために、研修に研修を重ね学校独自の生活科の年間計画を立てるのに翻弄されていました。振り返れば、いわば「ゆとり教育」の始まりだったのですが

…。

「生きる力」とよく言いますが、そのことも含まれていたと思います。

「生活科で何をする？」というのが正直、M先生も私も疑問を感じていたことです。

社会科というのは、物づくりの過程（工場見学など）や様々な仕事調べなど、低学年ではあるけれど、社会の仕組みを学ぶ教科として欠かせないものです。社会の成り立ちを伝える大切な教科だと思っていました。

理科は、生物や植物の観察や、身の回りにある事柄を科学的な視点で考え、疑問に感じたりしたことを調べるなど、事実について向き合わすという点で、これも子どもの成長時には、とても大事な教科だと今でも思います。

余談ですが、今若い先生の中に、例えば太陽、地球、月の関係を正しく教えられないといった事例があると聞きました。雨が降る仕組みなど、知らなくても良いことかもしれないかもしれませんが、私たちは感覚で身につけたことで生活ができていることが多いように思うのですが…。

いのちの学習

M先生との新しい生活科への実践が始まりました。生活科への疑問を持ちながらも、目の前の子どもたちを育てなければなりません。私たちは、今までの経験を活かし、様々な学習計画をしました。

それぞれの学校の特色を出す生活科ですが、私たちは、夏はトマト・キュウリ、冬なら大根などの作物づくりをし、収穫祭をしました。地域の人達と田んぼでの稲作にも挑戦したものです。また地域を探検し、時には昔の遊びや行事について学ぶこともありました。

今なら到底できませんが、毎日のように

近くの川へ行き、魚やザリガニと捕りをし、「ザリガニ運動会」などをしたりしました。30年前の子どもたちは、裸足で川を走り回り、水の流れや魚の動きなど一生懸命に体ごと遊ぶことができたのですね。

当時の管理職は、随分おおらかで、「ちゃんと連れて帰ってこいよ」と、その程度しか声をかけられませんでした。

何より私が好きだったのは、自然の中で群れ遊ぶ子どもたちを観察することでした。魚をつかめない子を手助けする子どもなど、子ども同士で学ぶ姿を見られた忘れられない時間でした。

その生活科で実践をしようとした学習の一つに、M先生と意気投合したのが「性教育」でした。

「命の学習」という名で、各学年ではそれなりに性教育は行われていましたが、私たちが目指す性教育は、一味違ったものでした。今までの「命の尊厳」といった神秘的な捉え方ではなく、人間の命の成り立ち

を科学的に説明する学習内容です。

就学時の子どもたちが疑問に思うことは、「自分はどのようにして生まれてきたのか？」ということ。そして「どこから生まれてきたの？」といったことです。

子どもたちに「みんなの命はどうやってできたと思う？」と投げかけてみると、色々言ってくれます。

わからない、知らないと言う子もいれば、お母さんのお腹を割って出てきた、股から出てきた、コウノトリが運んできたなんていう子もいました。さすがに、橋の下で拾われたというのはなかったですが。

現在、学校教育の中での性教育が充実しているかと言えば、残念ながらむしろ後退していると感じています。それには、色々な経過や事情があるのですが。

M先生との性教育実践は、学校内でちょっとした波紋を投げかけることとなりました。

つづく